

生涯学習支援事業報告

事業の名称	東北大学オープンカレッジ 「杜のまなびや」	事業代表	野口 和人
目的	地域社会に対する貢献の一環として、また、インクルーシブ教育の発信としてオープンカレッジを位置付け、知的障害者の生涯学習にかかわる支援を行う。また、受講生・企画運営スタッフ・講師が「学び」の意味を再考する場とする。		
対象者	知的障害のある学外受講生 宮城県内の大学・大学院に在籍する学生		
内容	近年、障害者の生涯学習保障が政策レベルでも重要な課題とされている。平成31年3月に出された有識者会議報告および令和元年7月8日付けの文部科学省総合教育政策局長通知では、大学等における「知的障害者等の学びの場づくり」について言及されており、その取り組みを積極的に進めると同時に、知的障害者等の学びの場づくりに関する実践的な研究を進めることが求められている。 本事業では、当研究科の生涯学習支援事業と位置づけられる以前の2006年度から、知的障害者の生涯学習の機会を提供するオープンカレッジを開催してきた。また、オープンカレッジを実践的研究の場と捉え、インクルーシブ教育ないしはインクルーシブ社会の実現に関わる諸課題についての研究を進めてきた。しかしながら今年度は、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況によりオープンカレッジの開催は叶わなかった。それゆえ今年度は、事業開始から15年となる「杜のまなびや」事業の課題と展望について、「杜のまなびや」のまとめ役を担っている大黒空（博士課程前期2年の課程在籍）を中心に改めて整理することとした。 【「杜のまなびや」の課題と展望】 既に指摘してきたとおり、本事業の課題として人材確保が難しくなっていることが第一に挙げられる。「杜のまなびや」の運営は研究		

	室の大学院生・学部生が主体となっており，なかでも大学院生の果たす役割は大きい。しかし近年，大学院進学者が減少傾向にあり，とりわけ学部から大学院へと進学する者が少なくなっていることから，主体として事業を運営する人材の確保が困難となっており，また，事業実施のノウハウの継続という点でも課題が生じている。併せて，この事業に参加する共同学習者の確保も困難となってきた。これまで大学生を対象に共同学習者としての参加を募ってきたが，実際のところ，共同学習者はほとんどが教育学研究科の大学院生や教育学部の学部生となってきた。このような状況に対し，スタッフや講師の方からも共同学習者の参加をより多く望む声があり，広報や宣伝の方法についての工夫や改善が必要となっている。 さらには，参加者や講師が固定化する傾向も生じている。同じ人に繰り返し参加していただくことは友人関係ないしは仲間関係の構築といった点で意義あることと考えられるが，本事業の目的からすれば，より広く学びの場・機会を提供することについていっそうの工夫を図っていく必要がある。また，本事業では，知的障害者と共同学習者が共に学ぶ共同学習の実現をねらいとしているが，これまでは講義形式の内容が中心となっていたために，援助－被援助の関係が固定してしまいがちであった。 以上を踏まえ，大学外部の様々な機関や人材との連携を模索していくこととし，2019年度のオープンカレッジでは外部の講師に依頼し，座学ではない参加型の形式の講義の実施を試みた。しかしながら，共同学習者の参加が依然として少なかったために，共同学習の状況の変化については確認することができなかった。また，研究科内の講師に依頼していた際には生じなかった，学外講師への依頼に関わる手続きや調整に関する新たな課題も明らかとなった。学外講師への依頼等に関しては今後もノウハウを蓄積していくとしても，共同学習者の確保していくことや今後より多くの方に学びの場や機会を提供していくことを考えれば，自治体との連携なども積極的に図っていく必要があろう。 さらに，今年度の新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ，またこれまで述べてきた様々な課題への対応としても，Webを介したオンラインでの事業実施の可能性について検討する必要がある。周知の通り，新型コロナウイルス感染症拡大の状況下において生活や学びが大きく変化しており，一定のICT環境が整い，ある程度のICTスキ
--	--

	ルがあれば、自宅からでも様々な学習の場に参加することが可能となっている。一方で、オンラインによる学習を実施するうえでの課題等も指摘されてきている。そこで、数は少ないながら知的障害特別支援学校におけるオンラインでの授業実施に関する報告をもとに、オンラインによるオープンカレッジの実施可能性とその際に生じる諸課題について考えてみたい。 水内（2020）は、対面式の授業では行いうる配慮がオンラインの授業では難しく、また普段用いている支援ツールがオンラインでは使えないことにより、オンラインでは対面式と同等の授業の実施が難しくなることを指摘するとともに、「双方向性」の実現が課題であるとしている。竹・湯浅（2020）は、ある事例ではオンライン形式の授業において双方向的関係が生じるものの、日々の体調や機器の取り扱いへの支援の必要性の程度、音声言語の使用の程度により、オンラインでの授業実施が難しい場合があることを報告している。 以上を踏まえると、オンラインでオープンカレッジを実施するに当たっては、当然のことながら、まずは ICT 環境を含め、各参加者の実態を把握する必要がある。さらには、対面式で実施する以上に、個々の参加者の実態や状況に応じた講義資料の作成やサポートの方法についても検討していく必要があるだろう。これらについて検討していくことは、with コロナ、after コロナの状況における知的障害者の生涯学習の在り方に関する知見を提供することにも繋がることであり、大学に対して現在求められていることに応えることにもなるだろう。 文献 水内豊和（2020）知的障害特別支援学校の「オンライン授業」や「動画配信」を考える．https://note.com/tmlab2003/n/na9bc4fc14806（2021 年 3 月 1 日閲覧） 竹美咲・湯浅周子（2020）緊急事態宣言下での子ども・保護者・教師間の関わり相互性：特別支援学校における ICT を活用した実践から．日本教育学会第 79 回大会発表要旨集録，198-199.
--	---